



TITLE:

系統研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

江原, 昭善; 野上, 裕生; 相見, 満; 瀬戸口, 烈司; 松本, 真

CITATION:

江原, 昭善 ...[et al]. 系統研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1983, 13: 27-28

ISSUE DATE:

1983-10-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163234>

RIGHT:

末端域一次構造の決定。第55回日本生化学会大会, 大阪。

- 8) 景山 節, 高橋健治 (1982): ペプシノーゲンの活性化機構。第53回日本動物学会大会, 大阪。
- 9) 景山 節, 高橋健治 (1983): ペプシノーゲンの活性化ペプチドの一次構造に基づく哺乳動物の系統関係。第40回日本生化学会中部支部例会, 岐阜。
- 10) Niwa, M., K. Ohashi, M. Umeda, S. Iwanaga, T. Morita and S. Nakamura: Basic and Applied Studies of Limulus Test. International Symposium on Chemical and Biomedical Aspects of Bacterial Endotoxin and Related Products (1982, Susono)
- 11) 中村 伸, Jack Levin: Limulus 反応の開始機作—Activator の精製及び分子性状。日本薬学会第103年会 (1983, 東京)
- 12) 浅岡一雄, 高橋健治 (1982): ウシ肝臓グルタチオンS-トランスフェラーゼの精製と性状。第55回日本生化学会大会, 大阪。
- 13) 浅岡一雄, 高橋健治 (1983): トリアジン色素リガンドによるグルタチオンS-トランスフェラーゼのアフィニティークロマトグラフィー。第103年会日本薬学会大会, 東京。

系統研究部門

江原昭善, 野上裕生
相見満, 瀬戸口烈司
松本 真*

霊長類の系統研究や形態学的研究にとって不可欠な標本や資料の作製と整理は, 所内の資料委との協力のもとに, ほぼ完成に近い状態になった。今後は体系化された方針のもとに, 資料の増加・充実がはかられるべきであろう。つまりソフト化された, これらの標本リストを見渡して, 重要でありながら不十分な資料については, 国内・外の諸機関と交換その他の手段を通じて充実していくことが, 部門および資料委の当面の目標になることだろう。これらの努力を通じて標本の充実をは

かることは, とりもなおさず系統研究・形態学的研究の基盤になるものである。

現在, 部門スタッフは, 南米・東南アジア・アフリカなどの海外調査を継続中であり, それぞれに成果をあげつつある。フィールド面からみると, 分散してみえる当部門も, 情報や成果について頻繁に討議を重ねており, 系統研究という学問的座標のなかでは集約的であり, 許容された条件下ではマキシマムの研究体制を維持しているといえる。

以上のほかに, 当研究部門は東海地方各地の遺跡を通じて, 地域の要望にも応じて, この地方における人骨や獣骨研究についてセンター的役割りをしだいに強化しつつある。

研究概要

- 1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究
 1. ヒトおよび霊長類の下顎骨の機能的・形態学的研究
 2. ヒトおよび霊長類各分類群における頭蓋底部の形態と posture の関連
- 2) ケニアおよびエチオピアにおける化石霊長類および化石人類の研究 江原昭善, 木下実
- 3) 東海地方先史遺跡出土人骨・動物骨の研究 江原昭善・松本真・木下実
- 4) 硬組織の形態学的研究 野上裕生
- 5) スマトラにおける第四紀地史の研究 野上裕生
- 6) ジャワ島における第四紀哺乳類の研究 相見 満
- 7) スマトラにおける霊長類の形態学的研究 相見満・松本真
- 8) 第三紀食虫類・原猿および有袋類の研究 瀬戸口烈司

1. 南米出土化石について

瀬戸口烈司・名取真人

2. 南北アメリカ大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

総説

- 1) 江原昭善 (1982): 人類の地平線。小学館。
- 2) 江原昭善 (1982): 「家畜化」概念の人類学への転用とその矛盾。Domestication の生態学と遺伝学。
- 3) 江原昭善 (1983): 古人類。中国新年鑑 1983。大修館。

*印は研修員

- 4) 江原昭善 (1983) : 人類学からみた殺人の論理。講談社「本」5月号
- 5) 瀬戸口烈司 (1983) : リスザルの歯列にみられる性的二型 — 亀井先生のコメントへのリプライをかねて — 。季刊人類学, 14 : 29-45。
- 6) 江原昭善 (1983) : 上記論文(5)へのコメント。季刊人類学, 14-49。

論文

瀬戸口烈司 (1983) : ホエザルの上顎臼歯の個体変異と臼歯の構造から見た南米ザルの系統。人類学雑誌, 91 : 1-10。

報告

- 1) 江原昭善, 木下 実 (1983) : 朝日遺跡 SX-2 号墓出土の人骨について
愛知県教育委員会
- 2) 江原昭善, 木下 実 (1983) : 緒川城跡出土の人骨
東浦町教育委員会編
- 3) 江原昭善, 木下 実 (1983) : 愛知県一宮市法円寺遺跡にて収集された中世火葬骨について。
- 4) Setoguchi, T., et al., (1983): La Dentina Superior de *Stirtonia* (Ceboidea, Primates) del Mioceno de Colombia. Kyoto Univ. Overseas Res. Rep. New World Monkeys, Ⅲ.: 1-11.
- 5) Aimi, M., et al. (1983): Morphological variation of the crab-eating macaque, *Macaca fascicularis* (Raffles, 1821), in Indonesia. Kyoto Univ. overseas Res. Rep. Studies on Asian Non-human Primates : 51-55.

学会発表

Setoguchi, T. (1982): Relation between Morphology and Function of the Dentition in the *Stirtonia-Alouatta* Lineage (Ceboidea) IX-th Congress of the International Primatological Society, Atlanta, USA.

瀬戸口烈司 (1983) : 「サルの墓場」の発見。
第27回プリマーテス研究会。

幸島野外観察施設

川村俊蔵 (施設長・兼)
渡辺邦夫

幸島野外観察施設は昭和43年に新設されて以来十数年を経過し、観光客の増加等の問題はあるにしても、安定した運営が続けている。昭和57年度に本施設を利用した研究者は延べ139人であった。

群れの概況としては、主群・マキグループ共にほぼ安定したまとまりを保ち、この状態が定着している。島内の個体数は前述したマキグループ15頭を含め、58年3月末現在94頭である。57年度中の出産は11例であるが、うち5頭はその後死亡している。

一昨年頃より幸島のサルが浜に放置された魚を食べる行動がよくみられるようになったが、58年3月14日の時点で30頭以上にひろがっているのが確認された。特に冬場に顕著に見られ、夏場にはほとんどみられないことから、栄養面での過不足が生じているのかもしれない。体に釣り糸をつけた個体もみられるに至っており、何らかの対応にせまられている。

この夏には島との間が非常に接近し、歩いて渡れるまでになったが、秋の台風で地続きになることはまぬがれた。しかし、毎年島と地続きになる可能性はさげえない状態であるといえよう。

本施設は57年度いっぱいでは拡充改組され、従来の研究林とともに、ニホンザル野外観察施設として、再出発することになった。また長年本施設の運営に多大の協力を負いられなかった時任岩助氏が58年4月26日、天寿を全うされた。御冥福を祈りたい。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的・社会学的研究

渡辺邦夫, 三戸サツエ

山口直嗣, 冠地富士男

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集し、定期的にはほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルなできごとや、通年の変化について分析をすすめている。

2) セレベスマカクの社会生態学的研究

渡辺邦夫

昭和56年度に行ったインドネシアでの調査をも